

切手の日誌

Stamp Diary



2011年1月号

1月2日（ルーマニア1975）

今年最初の話題は、昨年末ルーマニアのコジョカル氏から届いたルーマニア切手からの紹介である。使用済のはずが、やけに状態が良く、よくよく眺めると全く使用感がないものが多い。恐らくCT0と推測する。

つい先日学習したのであるが、CT0 (Cancelled To Order)とは、売れ残った切手に消印を押して安く売り捌いたもので、かつては東欧諸国などの外貨獲得の一端を担っていたとか。そう言えば、私も一番最初に手にしたのは、お菓子のオマケ（グリコ？）だった綺麗なハンガリーの浮世絵をモチーフにした大型切手である。昨年、在庫整理で手放してしまったが。



これも消印が右上にひっそりと、絵柄の邪魔にならぬよう押されているところを見ると、CT0の可能性は高い。私はCT0を否定的にとらえるつもりはないが、わざと使用済とするということは少し悩ましいかも。

大きさを実感できるよう、日本の普通切手と並べてみた。コジョカル氏からの他の切手はシリーズものが多い中、これは数少ない単独であり、きっと日本人の私が喜ぶだろうとセレクトしてくれたと信じている。

1975年に発行された沖縄国際海洋博覧会にちなんだ切手と思われる。沖縄返還（1972年）間もないころの東欧が抱く日本・沖縄のイメージなのだろうか。たとえCT0でも結構気に入った。よくよく見ると、波の形が、葛飾北斎風になっている。

1月3日（西ドイツ1972）

明日は仕事初め（始め?）。お正月休みの最終日、人ゴミなんぞに出る気はなかったのだが、ひよんなきっかけから新宿京王デパートにある切手商フクオに寄り道してしまった。せっかくなので、ドイツ切手5枚100円+ベトナム切手4枚100円の200円分お買い物した。これはそのうちの1枚である。



西ドイツで1969年～1973年に発行した観光切手シリーズ13種類のうちの1枚で、1972年に発行された「ハイデルベルク（古城とドイツ最古の大学で知られる町）」とのこと。切手でなくても、こういう線画調や版画調のものには心惹かれてしまう。しかも、セザンヌのように、限られた空間（この場合切手の大きさ）に画を収めるため、歪（いびつ）を感じさせることなく対象物を描いているのが、これまた魅力的なのである。

収集の対象は使用済切手なので、残りの種類も出会いを待ちながら気長に集める。なお、西ドイツの切手では当シリーズ以外にも、作者（デザイナー?）が同じではと思われる似たような図柄があるので、作者もネットを駆使してみれば判明できるかな?

1月4日（ラアス・アル＝ハイマ1972）

どこの国？という感じだが、アラブ首長国連邦を構成する首長国の1つだそう。今日は1つ悪い見本を紹介しよう。暇な仕事始めの日のお昼休み、wikipediaで切手関連のネタを漁っていたら、見つけてしまった。

以下 <http://ja.wikipedia.org/wiki/土侯国切手> からの引用で

土侯国切手（どこうこくぎって）とは、1960年代から1970年代にかけて郵便に使用する目的でなく、切手収集家目的に濫発された郵便切手に対する総称である。アラブ土侯国切手と呼称される場合もある。～一部略～

土侯国切手は、実際には郵便事業に使われないような切手を濫発した結果、世界中の切手収集家の鬱蹙を買ったため、現在でも正規の郵便切手ではなくラベル扱いされる。そのため世界的な切手カタログである「スコットカタログ」に収録されていないほか、切手収集家による国際的な切手展（切手コレクションコンクール）の出品リーフに土侯国切手を入れると大きな減点にされる。～引用ここまで～

ということで、CT0（注文消）より収集家の弱みにつけ込んだ切手なのである。他、wikipedia の内容をじっくり読んでみると、図案のテーマや内容も省みず、えげつなさ満載の後、数点そういう品のない切手が掲載されているのだが、そのうちの1つがこれである。思わず「あっ、これ持っている、私」と独り言が出てしまった始末。



お店で見つけたとき、自分でも怪しい、絶対収集家（カモ）目当ての切手に違いないと理性ではわかっていながら、確信犯的に買ってしまった。1971年に発行された札幌オリンピックを記念する切手らしいが、サッポロとかけて札幌テレビ塔とサッポロビールの組合せを見逃すことができなかったのである。

1月5日（ルーマニア2009）

またルーマニアで申し訳ないが、コジョカル氏から沢山もらったので、こればかりに目がいくのも仕方がない。それに、今日また見つけてしまったのだから、仕方がない。

見つけたというのは、もらった雑誌「スタンプマガジン」のバックナンバー2009年8月号を流していたら、これに出会ってしまった。



「世界の極地保護切手」のスポット記事があり、そこで紹介されていた。記事からの引用によると、「環境保護をテーマに40カ国以上が参加する世界規模の共同発行」とのこと。真ん中にある*のような印がシンボルマークで、私が先月号の12月22日で紹介したのが日本版だそうだ。

なおルーマニア版は報道資料図案なるものの発表後、ペンギンなどが追加されたとか。左の切手は気づかなかったが、記事によると「涙を流す小売りの中の目」となっている。ふむふむ。コジョルカ氏は素敵な切手を送ってくれた。なお、カタログ価格1,300円です。

実はこのコジョルカ氏、私の切手も気に入ってくれたのか「you can repeat .. (また送ってもよいぞお)」と言ってきているので、しばらくお付き合い続くかも。さて、次は何を送ってあげようか。

1月7日（香港1974）

少し、アジア各国の切手の感じをつかみたくて。そこで、ついYahoo!オークションで買い物してしまった。

中国切手 香港 台紙 いろいろ 45枚 200円

しかし、商品手元に届いてみると、45枚のうちダブリが23枚「も」ある。まあ、いいとしよう。バリエーションを配した普通切手も20枚ほどあったが、まあ、諦める。これはそのうち、ダブリのない1枚ものである。



1974年に発行されたArts Festivalを記念した3枚ものの1枚であった。香港アートフェスティバルは1972年から始まり、2010年も実施されたとのこと。それ以上の内容は、私の情報力では不明であるが、香港切手にはまだまだ強い魅力は乏しいかも。

1月8日（アメリカ1966）

東京目白にある切手の博物館の切手バザールをのぞいてきた。存在は知っていたが、今回初めて行ってみた。一步、部屋に足を踏み入れたところ、ご年配のおじさまたちの世界であったが、さほど違和感もなく場に入り込めたと思っている。

「多摩フィラテリックセンター」で使用済30円/1枚を700円（端数切捨てサービス）ほど購入し、商品が売れないからとミッキーマウスの彼女ミニーのぬいぐるみを無料でちょうだいした後、何となく足を止めた「趣味のテーブル」の外国切手貼込帳の使用済10円/1枚に捕まった。最初に捕まれたのは、この1枚である。



今となっては大活躍のMystic's U.S. Stamp Catalog 1997 Editionによると、1966年発売のJolly Clownとある。なるほど、このピエロは J. Clown氏かとネットを調べても現れない。American Circus界での有名人に違いないと思ったのに。結局見つけたのは、English Dictionary で、jolly (形容詞) 陽気な、clown (名詞) 1 (サーカスなどの) 道化役者。2 お調子者、おどけ者、というのが正体と確信した。

次にピアノのレッスンがあり時間足りなく、他に大好きなチェコの切手など10枚ほど購入した。私はどうも、こういう切手が好きなようだ。凸版印刷なのだろうか。意味不明なテーマも気になる。何故1966年に突然1枚だけ、ピエロの記念切手を発売したのだろうか。それほど、サーカスが話題になったのだろうか

1月9日（アメリカ1962）

渋谷を経由する予定があったので、日郵コインに寄り道してしまった。数年前、フリリと寄ったとき、韓国の使用済み切手をがつつり購入した記憶があるので、それを期待していたが、残念ながら跡形もなかった。

使用済みはないかと問うたところ、店の片隅にあったみかん箱弱のクリアケース2個に未整頓のまま、どっさり放り込まれてあった。1枚/10円とのこと。これで何万(?)枚くらいあるのだろうかと思いつつ、野良犬の残飯漁りのごとくガサゴソとお宝を探す。これはそこで見つけた1枚で、お宝というほどではないが、色あせもせず比較的状态もよい。

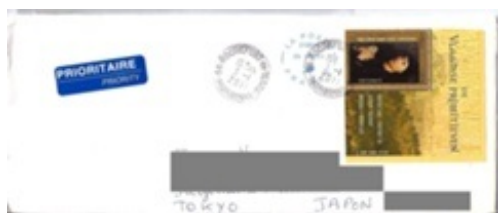


1962年発行のShiprock, New Mexicoとカタログには書かれている。なぜShiprockなど理屈っぽいことは微塵も思わず、この切手が貼られた封筒を受け取ったら、嬉しいかもと妄想しながら喜んでいる。大したお宝はないと言いながら、厳選を重ね660円分も購入した。

たった1ヶ月前には、無造作に箱につめられていたアメリカ切手にうんざりしていたのに、今後はさらなるアメリカ切手を求めて散財させられそうである。

1月11日（フランス）

フランスのジョゼから手紙が届く。



コジョルカ氏の後のやり取りだけに、メールのときはさほど好感もなかったが、この封書には丁寧なメッセージカードも添えられており、「I will be happy to trade with you again (もう一度、交換できたら嬉しいな)」と書かれていた。とりあえず、ノーと言わない私はまたもや応じることにした。

今月号の表紙は、ジョゼからももらったものの一部である。なお、100枚ずつの交換レートであり、私は気持ちをつけて103枚送ったところ、ジョゼは101枚であったが、4枚重複があった。フランス人は数えるのは苦手そうだから、許すとする。

フランスは私の収集対象予定国から外れるが、結構魅力的な切手も多いので適当に集めるつもりである。やはり、気になってしまう。

1月13日（日本1999）

またもYahoo! オークションで買ってしまった。

記念特殊 使用済み 1000枚 ¥1,280

現在、集計中(?)なので正確な枚数と種類（重複も結構ある）は不明であるが、それなりの量があり、確認作業も一仕事である。が、夜な夜な少しづつ分類するのが楽しく、こういう作業が好きな性格なのであろう。

正直、日本切手は全て手放そうかと考えていた一方、ガツンと訳もなく落札してしまった。しかし、こうしてじっくり多数の日本切手を眺めていると、改めて日本の切手もすばらしいと思う。今回の作業で再発見したのが、「日本の民家シリーズ（1997年～1999年）」からの1枚で、第5集に発行されたたもの。



リアリティありますが、写真ではない。グラビア5色・凹版1色とあるが、この（バカの一つ覚えである）「凹版」というのに私は弱い。虫眼鏡で見つつ惚れ惚れしているが、これで80円は安いでしょう。自分の中で、このシリーズは全部揃える方向で検討中とした。

1月15日（オランダ）

オランダのベルタスくんから手紙が届く。これまでのルーマニア、フランスから届いた手紙と比較して、一番平凡… とい
うか、感動が薄かった。密かに期待していたのだが。しかも、5枚は「damaged stamps」として返却され、100枚の約束が重複な
しの97枚だったので、きっかり先方が受け取った分だけ、送ってきた様子である。確かによく見ると少しdamaged（ダメージ有
り）の切手であるが、なかなか厳しい。



なお、先方からはドイツ26枚、オランダ40枚、フィンランド20枚、デンマーク11枚という内訳であるが、オランダ40枚はこれ
また少々期待外れ。封書にある3枚のようなのが10枚、他も普通切手のような10枚セットで4シリーズ分である。文句を言っ
てはいけ
ないな。

1月18日（東ドイツ1984）

ドイツと思って落札し、手元に届いたのをよくよく確認すると、東ドイツである。勝手な期待でドイツ=西ドイツと思い込んでいたので、ソ連風の切手が現れたときは少しビックリ（がっかり？）する。



1984年発行「東ドイツ建国記念35周年」という感じでしょうか。これは軍隊を彷彿させるが、他に工業や農業などの労働をベースにしたものが3枚での計4枚組である。少しずつドイツの切手を集めつつ、時代の流れの雰囲気を感じさせるコレクションを目指す。

1月20日（ポルトガル1977）

ドイツを落札したとき、出品者が同じであるのと、ポルトガル切手は全く持っていなかったため、送料のスケールメリットも考慮し一緒に落札してしまう。



まだ各国の特徴や雰囲気把握していないが、こちらは1977年発行の風景画シリーズ2枚組の1枚のようだ。SUL平原という感じか。シンプルだが、現代風景画のようで1977年には結構スタイリッシュじゃないか？と個人的には気に入っている。

他にもまあまあ気に入った風景画をモチーフにした切手があったが、写真写りがよさそうなこれを選んだ。陽気（そう）な国々には難しいテーマより、斬新な色使いの切手を期待したい。

1月30日（オーストリア1983）

中野駅を経由する用事があったので、一度中野ブロードウェイにあるフクオ・スタンプ覗いてみた、今になって挑戦した。15年ほど前、中野に住んでいたが、あのときは行こうとも思わなかった。有名な「まんだらけ」に興味はないが、かなりフロア全体は「まんだらけ」に影響されキャラクターグッズやらフィギアなどのマニア臭全開だった。



ここでも無造作に箱に入れられた使用済み切手の専用箱を漁り、チェコ・スロバキアと東ドイツばかりを拾ったが、何気に関心あるオーストリアも2枚拾う。国の位置は東欧に近いし、何だか小難しい絵柄も捨て難い魅力を感じる。

これは1983年に発行されたハウアーという作曲家、音楽理論家の生誕100年切手だろうか。シェーンベルクより早く12音技法を發展させていた人らしい。右側は五線紙の音符だったのか。余談だが、私は東欧の音楽家およびピアニストは（ついでに数学者も）かなり興味ある。

10枚300円と書かれていたにも関わらず18枚を持ってゆく。おじさんに「10枚300円なんだけど…」と言われながら「????」という顔をしていたら、適当にサバいて540円と請求された。正直、自分の頭で「10枚300円」という意識なかった。

全く日本語すら通じていないから、外国語（英語）が通じないのは不思議じゃないと呆れた。